

## 水稻病虫害防除対策（7月）

### 1 いもち病（穂いもち）

- (1) 病虫害防除所ホームページ (<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>) では、6月から8月までBLASTAM（ブラスタム）による葉いもち感染好適条件の出現状況情報を提供しています。感染好適条件が広範囲で出現が認められると、その7～10日後に葉いもちがほ場で確認される全般発生開始期になり、例年7月上旬に認められます。
- (2) 葉いもちは、感染好適条件出現時に感染しやすく、その7～10日後に病斑が認められますので、7～10日間隔で感染好適条件が出現した地域では葉いもちの多発生に注意してください。
- (3) 葉いもちの発生が認められる場合は、早急に茎葉散布剤による防除を行ってください（表1）。
- (4) 穂いもち対象の水面施用剤は、各薬剤の使用時期を逃さずに施用してください（表2）。
- (5) 散布剤で穂いもち防除を行う場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回散布を基本に実施して下さい。穂いもちが多発するおそれがある場合には、さらに傾穂期に追加散布を行ってください。
- (6) 薬剤防除の実施に当たっては、次のことに注意してください。
  - ア 耐性菌の出現を防ぐため、同じ系統の薬剤の連用は避けてください。県内でもQoI剤（表中の薬剤系統C3）に対する耐性菌の発生が確認されています。QoI剤を含む育苗箱施用剤を使用した場合は、本田防除では系統の異なる薬剤を使用してください。
  - イ 水面施用剤は、湛水状態にして所定量を均一に施用してください。施用後は7日間以上、止水状態を保ち、落水や掛け流しはしないでください。
  - ウ アミスターエイトはリンゴの一部品種に薬剤を発生させる場合があるため、リンゴにかからないよう注意してください。
  - エ パック剤やジャンボ剤は、藻や浮草で拡散が阻害される場合は使用を避けてください。

表1 いもち病（葉いもち、穂いもち）の防除薬剤（茎葉散布剤）

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 使用量（散布液量）	使用回数 の制限※
粉剤	ノンプラス粉剤DL	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
		フェリムゾン	U14			
	ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14			
		フサライド	I1			
液剤、乳剤、 フロアブル 剤、ゾル剤	アミスターエイト	アゾキシストロビン	C3	収穫14日前まで	1,000～1,500倍 (100～200L)	3回以内
	カスミン液剤	カスガマイシン	D3	穂揃期まで	1,000倍	2回以内
	ノンプラスフロアブル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	1,000倍 (60～150L)	2回以内
		フェリムゾン	U14			
	ビームゾル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	1,000倍	3回以内
	フジワン乳剤	イソプロチオラン	F2	収穫14日前まで	1,000倍 (60～150L)	2回以内
	ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍 (60～150L)	2回以内
フサライド		I1				

表2 穂いもちの防除薬剤・水面施用剤（粒剤、パック剤、ジャンボ剤）

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	10a当たり使用量	使用回数 の制限※
粒剤、 パック剤、 ジャンボ剤	キタジンP粒剤	I B P	F2	出穂10日前	3～5kg	2回以内
	コラトップ粒剤5	ピロキロン	I1	出穂15～10日前	3～4kg	2回以内
	コラトップ1キロ粒剤12			出穂15～10日前	1～1.5kg	
	コラトップジャンボP			出穂15～10日前	小包装（パック）10～13個（500～650g）	
	フジワン粒剤	イソプロチオラン	F2	出穂30～10日前 (収穫30日前まで)	3～5kg	2回以内

表3 無人ヘリコプター（無人航空機）散布によるいもち病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 散布液量	使用回数 の制限※
乳剤、ゾル剤	アミスターエイト	アゾキシストロビン	C3	収穫14日前まで	8倍、0.8L	3回以内
	ビームゾル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	6～8倍、0.8L	3回以内
	フジワン乳剤	イソプロチオラン	F2	収穫14日前まで	8倍、0.8L	2回以内
	ブラシンゾル	フェリムゾン フサライド	U14 I1	収穫7日前まで	8倍、0.8L	2回以内
粒剤	コラトップ粒剤24	ピロキロン	I1	穂いもちに対し ては出穂30日前 ～5日前まで	0.5kg	2回以内
	コラトップ1キロ粒剤 12				1kg	

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・トリシクラゾールを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、育苗箱への処理は1回以内、本田では3回以内）
- ・フェリムゾンを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・フサライドを含む農薬の総使用回数：3回以内
- ・アゾキシストロビンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内）
- ・カスガマイシンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、種子浸漬は1回以内、育苗箱への処理は1回以内、本田では2回以内）
- ・イソプロチオランを含む農薬の総使用回数：3回以内（但し、移植前は1回以内、本田では2回以内）
- ・I B Pを含む農薬の総使用回数：3回以内（粒剤は2回以内）
- ・ピロキロンを含む農薬の総使用回数：3回以内（但し、直播での種時又は移植時までの処理は1回以内、本田では2回以内）

## 2 紋枯病

- （1）本病は、前年に病斑上に形成された菌核が地表に落下し第一次伝染源になるため、昨年発生が多かったほ場や風下の畦畔沿いに発生しやすいです。
- （2）幼穂形成期頃に水際の葉鞘に発病し、上位葉鞘に病斑が進展します。
- （3）密植や窒素成分の多いほ場では発病しやすくなります。
- （4）高温多湿が続くと上位葉鞘への進展が激しくなり、第3葉鞘以上の葉鞘に発病して葉が枯れると減収などに結びつきます。また、茎が弱くなり倒伏しやすくなります。
- （5）出穂後も高温多雨が続くときは、止葉葉鞘に上がり穂が枯れるおそれがあります。
- （6）散布剤による防除は、上位葉鞘へ進展する前の穂ばらみ期に行います。多発の兆候が見られたら、穂揃い期に2回目の茎葉散布を行います。
- （7）アミスターエイトはリンゴの一部品種に薬剤を発生させる場合があるため、リンゴにかからないよう注意してください。
- （8）オリブライト1キロ粒剤は急激な温度上昇が起こる気象条件では、イネの葉に葉斑を生じる場合があるため、注意してください。

表4 紋枯病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 散布液量	使用回数 の制限※
水面施用剤	オリブライト1キロ粒剤	メトミノストロビン	C3	出穂10日前まで (収穫45日前まで)	1kg	1回
	モンガリット粒剤	シメコナゾール	G1	出穂28～14日前 (収穫45日前まで)	3～4kg	2回
	リンバー粒剤	フラメトピル	C2	出穂30～10日前 (収穫30日前まで)	3～4kg	2回
散布剤	アミスターエイト	アゾキシストロビン	C3	収穫14日前まで	1,000～1,500倍	3回
	バリダシン液剤5	バリダマイシン	U18	収穫14日前まで	1,000倍	5回
	モンカットファイン粉剤20DL	フルトラニル	C2	収穫14日前まで	3～4kg	3回

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・メトミノストロビンを含む農薬の総使用回数：1回
- ・シメコナゾールを含む農薬の総使用回数：2回以内（移植時までの処理は1回以内）
- ・フラメトピルを含む農薬の総使用回数：2回以内（直播での種時又は移植時までの処理は1回以内）
- ・アゾキシストロビンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内）
- ・バリダマイシンを含む農薬の総使用回数：6回以内（育苗箱灌注は1回以内、本田では5回以内）
- ・フルトラニルを含む農薬の総使用回数：3回以内（小包装投入は1回以内）

### 3 稲こうじ病

- (1) 稲こうじ病は、穂ばらみ期に低温、降雨が多い場合や窒素過多のほ場で発生しやすい病害です。
- (2) 常発地帯では、ほ場の土壌中に菌が常在しており、田植後早い段階から稲体に侵入し、穂ばらみ期に降雨や日照不足などの発生を助長する条件が整うと発病します。天候予報などで穂ばらみ期に降雨が予想される場合は、出穂前に薬剤防除してください(表4)。
- (3) 銅を含む薬剤は葉が濡れている場合は葉害を生じ葉いため、注意してください。また、銅を含む薬剤を散布する場合は出穂10日前までに施用してください。

表5 稲こうじ病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 散布液量	使用回数 の制限※
水面施用剤	モンガリット粒剤	シメコナゾール	G1	出穂21~14日前 (収穫45日前まで)	3~4kg	2回
散布剤	Zボルドー粉剤DL	銅	M1	出穂20~10日前	3~4kg	—

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・シメコナゾールを含む農薬の総使用回数：2回以内(移植時までの処理は1回以内)

### 4 イネアオムシ(フタオビコヤガ)

- (1) 本虫は多化性で、本県では例年7月下旬、8月下旬に発蛾最盛期になっています。その10日後頃から幼虫の被害が目立ってきます。特に、穂ばらみ期から出穂期にかけて幼虫の被害が多くなり、止葉が食害されることもあります。
- (2) 窒素過多による過繁茂なほ場、幼虫期に曇雨天が多い年、山間地など風通しの悪い地域などでは発生が多くなりやすいので発生に注意してください。
- (3) 防除は、7月下旬~8月中旬にかすり状の食害が見られたら行ってください。

表6 イネアオムシの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 散布液量	使用回数 の制限※
スミチオン乳剤	MEP	1B	収穫21日前	2,000~4,000倍	2回

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・MEPを含む農薬の総使用回数：3回以内(種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内)

### 5 ヒメトビウンカ

- (1) 本虫はイネ縞葉枯病などのウイルス病を媒介するので、これらの病害が発生しているほ場では本虫の防除を行ってください。
- (2) イネ縞葉枯病の感染時期は、定植から幼穂形成期までのため、6月下旬から7月上旬に本虫の防除を行いましょう。特に、麦畑に近接した水田では早い時期から侵入するので、早めの防除を行ってください。

表7 ヒメトビウンカの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 散布液量	使用回数 の制限※
スミチオン乳剤	MEP	1B	収穫21日前	1,000倍	2回
マラソン乳剤	マラソン	1B	収穫7日前	2,000倍	5回

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・MEPを含む農薬の総使用回数：3回以内(種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内)
- ・マラソンを含む農薬の総使用回数：5回以内

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農薬登録情報提供システムホームページ(<https://pesticide.maff.go.jp/>)等で最新の登録内容を確認してください(記載中の登録内容は令和4年6月6日現在)。  
液剤、水和剤、乳剤、フロアブル剤は、10a当たり140~150L散布する。